

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：33936

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14393

研究課題名（和文）ライフスキルおよびSOCの向上を目的とした心理教育プログラムの開発と効果検証

研究課題名（英文）Development and effectiveness of a psychoeducational program to improve life skills and sense of coherence

研究代表者

嘉瀬 貴祥（Kase, Takayoshi）

人間環境大学・総合心理学部・講師

研究者番号：40804761

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、日常生活における課題解決を促進する心理社会的能力であるライフスキル（LS）と人生を通じたストレス対処の能力である首尾一貫感覚（SOC）の関連性を定量的に明らかとし、その結果に基づいて大学生を対象とした心理教育プログラムを開発した。定量的研究の結果、LSを高めることで日常生活におけるストレスへの効果的対処が促進されるが、この際にストレスへの対処に積極的な意味を見出すことができればSOCも強化されることが示唆された。加えて、このような経験へとつながる行動や思考を心理教育プログラムに導入することの意義が明らかとなり、プログラムの開発を進めるための重要な知見が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題では、長期的適応を助ける首尾一貫感覚（SOC）と短期的適応を促すライフスキル（LS）との相互関係性や因果関係を、質問紙調査と統計分析を用いた縦断的な量的研究により精緻に明らかにすることができた。この知見は、SOCとLSを同時に向上、強化するLSTの開発に必要な知見であり、今後も引き続き行われる健康教育プログラムの開発研究に大きく貢献するものである。またこの知見を、教育機関や企業での実践例が多いLSTに導入し、プログラムの内容を検討することができた。効果検証の実施などの課題があるが、このことで、社会における導入可能性の高いプログラムを提案する基盤が構築されたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to quantitatively clarify the relationship between a sense of coherence (SOC; i.e., an ability to cope with stress throughout life) and life skills (LS; i.e., a psychosocial ability to facilitate problem solving in daily life). Additionally, we qualitatively examined life skills training (LST) for university students based on the results of the quantitative study. These examinations showed that though the effective countermeasure to stressors in daily life is promoted by improving LS, SOC is also strengthened, if a positive meaning for the countermeasure to the stressor can be found at the same time. Moreover, it is suggested that by including these experiences into LST, they can contribute to the maintenance and improvement of long-term mental health.

研究分野：教育心理学，健康心理学，パーソナリティ心理学

キーワード：首尾一貫感覚 ライフスキル ライフスキル・トレーニング 心理測定尺度

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究背景の概要

情勢の変化が激しく人生の予測可能性が低い現代社会において、社会生活に進む直前の時期である大学生のメンタルケアやキャリア支援は大きな課題である。社会適応に必要な心理社会的能力であるライフスキル (Life Skills: 以下, LS) と、個人の人生観を含めたストレス対処能力である首尾一貫感覚 (Sense of Coherence: 以下, SOC) は、これらの課題の解決に対して重要な意味を持つ要因である。研究代表者のこれまでの研究より、LS を高めて社会生活で生じる問題の解決を促進することが、SOC の強化につながることを示された。すなわち、SOC の強化を視野に入れて LS の向上を図ることができれば、先述した諸課題に対する効果的な支援策となる。そこで本研究では、①LS と SOC およびこれらに関連する心理社会的要因に関する精緻な理論モデル (因果モデル) を構築すること、さらにこの理論モデルに基づいて、大学生における精神的健康およびライフキャリアに対する教育的支援策として②LS の向上と SOC の強化を目的とした心理教育プログラムを開発することを目的とする。

(2) 研究の学術的背景

学校不適応や就業困難につながる大学生における精神的健康の低下は、解決すべき重要な問題である。精神的健康の向上に対して有効であるのが、LS の向上を目的とした「ライフスキル・トレーニング (Life Skills Training: 以下, LST)」である。LS は「日常的な課題に対して効果的に対処するために必要な心理社会的能力」と定義され (WHO, 1997)、社会情勢の変化が激しい現代社会への適応に対する重要性が非常に高いものとなっている。特に大学においては、学校不適応の予防など健康的な学生生活を送る目的だけでなく、卒業後の進路決定に対しても LST の必要性が指摘されている。LS にはストレスや自分の感情へ適切に対処するといった個人的スキル、他者と効果的に関わるといった対人スキルが含まれる。LST によりこれらのスキルを向上 (問題解決的な認知への変容、感情調節機能や対人スキルの向上) することで、個人が抱える認知面、感情面、行動面の問題を効果的に解決し、精神的健康の向上に寄与する。

(3) 研究代表者のこれまでの研究

研究代表者は、LS と精神的健康の関連についての実証的知見の不足、LS における性差の検討不足、LS 測定尺度における問題といった先行研究における課題点をふまえたうえで、青年・成人用 LS 測定尺度の開発 (嘉瀬他, 2016)、LS と精神的健康の関連性の詳細な検討 (嘉瀬他, 2015) を行った。その結果、現代社会において青年・成人に求められる LS の測定尺度が開発され、LS の向上は精神的健康の向上に寄与することが性差などを含めて詳細に示された。

さらに研究代表者は上述した研究と並行して行っていた SOC に関する研究 (e.g., Kase et al., 2016) を通じて、SOC は LS に対して重要な関連を持つ要因であると推察するに至り検討を行った。SOC は「自分の生きている世界は首尾一貫しているという人生に対する見方や感覚」であり、SOC を高く持つ者は自らの保持する資源 (e.g., 知識, 技能, ソーシャル・サポート) を効果的に動員することで、長期的にストレスへ対処することができる (e.g., Antonovsky, 1987)。研究の結果、SOC の高い者は LS が全体的に高く、ストレスに対してより効果的に対処可能な LS の階層的構造を有していることが示された (嘉瀬他, 2016)。さらに、LS を用いて社会生活において生じる問題 (e.g., 大学生における大学適応, 進路決定など) の解決を図ることは、SOC を高める人生経験 (①一定の規則を伴う経験, ②適度な努力を伴う経験, ③結果形成を伴う経験; Antonovsky, 1987) に相当する可能性が示された (Kase et al., 2019)。

2. 研究の目的

これまでに得られた研究知見を総括すると、LSの向上を通じてSOCを高める経験を体験できれば、LSの向上とSOCの強化を同時に図ることが可能となり、大学生の精神的健康の向上とキャリア形成に対する効果的な一次予防策になり得る。加えて、SOCは単なるストレス対処能力でなく明確かつ柔軟な人生観であり、生涯を通じた課題解決やライフスタイルやライフコースの形成に寄与する要因である(Antonovsky, 1987)。つまりSOCは、精神的健康の向上のみならず、LSTの主要な目的の一つであるライフキャリア(職業経験も含んだ生涯にわたる個人の生き方に関する展望や意味づけ)の構築とも強く関連する要因であると考えられる(嘉瀬他, 2018)。

そこで本研究では、介入方法の確立が課題とされるSOC(Super et al., 2016)とは対照的に、具体的なプログラムが複数提案されているLSTに視座を置きつつ、SOC強化をも視野に入れたプログラム(SOC-LSTプログラム)の開発を目指すこととした。現在、応募者の行った研究(e.g., 嘉瀬他, 2016)を除いてはSOCとLSの関連に注目した研究は認められない。LSとSOC、さらにこれらに関連する心理的要因の関連性が明らかにされることで、精神的健康の長期的な維持や向上とライフキャリアの構築を視野に入れた、より効果的かつ包括的なLSTプログラムの検討と実施が可能になると期待される。

3. 研究の方法

(1) 研究1: SOCとLSに関する理論モデルの構築と検証(量的研究): 2019年度

SOCとLSに関連する要因とそれらの因果関係を明らかにし(理論モデルの検証)、LSの向上を通じてSOCを強化するために必要な要因や手順を検討することを目的として、下記に示す研究を行った。

研究1: LSとSOCに関する理論モデルの構築

- ✓ LSとSOCおよび関連する要因間の因果関係(図1左部)の実証
- ✓ 大学生(N=800)を対象とした縦断的量的調査: 青年・成人用ライフスキル尺度(嘉瀬他, 2016), 日常生活スキル尺度(島本他, 2006), SOCスケール(山崎, 1999), Kessler 10 精神健康調査票(古川他, 2003), 大学生生活と就職活動に関する項目
- ✓ 約3ヶ月ごとに計3回の追跡調査
- ✓ 共分散構造分析を用いた同時効果モデルと交差遅延モデルによる因果関係の推定

⇒ 研究2で行う介入研究へ適用可能な理論モデルを構築

(2) 研究2: SOC-LSTプログラムの開発(質的研究+量的研究): 2020-2022年度

研究1で構築・検証された理論モデルをもとに、精神的健康の向上とライフキャリアの形成を視野に入れたSOC-LSTプログラムを開発することを目的として、以下に示す2件の研究を並行して行った。

研究2: SOC-LSTプログラム内容の検討(2020年度)

既存のLSTプログラムやそれらが依拠する理論の比較を行いつつ、研究1で得られた理論モデルに適した介入方法や介入手順を複数の研究者間で討議し、プログラムを作成する。

- ✓ 理論モデルをもとに既存のLSTプログラムを調整、改編
- ✓ SOCを高める人生経験(Antonovsky, 1987)のプログラムへの導入
- ✓ 作成されたプログラムの大学生に対する試行と内容の精査(N=10, 90分×5回)

4. 研究成果

本研究課題では、ライフスキル(LS)と首尾一貫感覚(SOC)、およびこれらに関連する

要因の因果関係を縦断的量的研究により実証的に明らかにすること、加えて、具体的なプログラムが複数提案されているライフスキル・トレーニング (LST) に視座を置きつつ、SOC の強化をも視野に入れたプログラムを開発し、試行と効果検証を行うことを目的としている。この目的に沿い、以下の3段階で研究を実行する計画を立てた。まず研究1としてSOCとLSに関する理論モデルの構築と検証を行い、次に研究2として研究1の結果をふまえた健康教育プログラムの開発に取り組み、研究3として開発されたプログラムの効果検証を行うという手順である。

2019年度は研究1の目的に沿い、日本全国の青年と成人を対象とした中規模 ($N=1,500$ 程度) のウェブ調査を計4件実施した。これらの調査により、SOCとLSの因果関係を検証するための必要な縦断的データが得られたほか、健康教育プログラムの作成時に考慮すべき精神的健康、性格特性といった要因に関する量的データを併せて収集することができた。加えて、2018年度に本研究の準備段階として実施していたウェブを介した自由記述調査 ($N=400$) の結果に基づいて、2019年5月～10月にかけて複数の研究者間で質的分析を行った。この検討を通じて、高いSOCを持つ者のストレスマネジメント様式の特徴を明らかにすることができた (嘉瀬他, 2020)。

2020年度は研究2の目的に沿い、健康教育プログラムの開発と試行に取り組む計画であった。しかしながら、調査参加者を募集する形式でのプログラムを試行することが新型コロナウイルス流行の影響から困難となり、研究計画を変更して進めざるを得ない状況となった。そこで、研究3として予定していたSOCを測定する尺度の信頼性と妥当性の検証に、先んじて取り組むこととした。また、新型コロナウイルスに対する予防行動とLSおよびSOCの関連を調査するという課題を新たに設定し、これらの目的に沿った中規模 ($N=1,500$ 程度) のウェブ調査を複数回実施した。これらの調査から得られたデータを用いて、尺度の信頼性と妥当性の多面的な検証と、予防行動に対してLSおよびSOCが持つ関連性についての基礎的な知見の取得を行うことができた (Kase, 2023)。

2021年度は研究2および3の目的に沿い、健康教育プログラムの開発と試行に取り組む計画であった。しかしながら、2020年度と同様に、調査参加者を募集する形式でのプログラムを試行することが新型コロナウイルス流行の影響から困難な状況が続き、研究計画を大幅に調整して進めざるを得なかった。そこで、研究3において発展的・副次的な目的として予定していた、SOCを測定する尺度の信頼性と妥当性の検証と、LSTによってもたらされるSOC向上以外の効果についての検討に取り組んだ。これらの目的に加え、2020年度に実施した新型コロナウイルスに対する予防行動とLSおよびSOCの関連の調査についても、ウェブ調査を利用しながら継続的に実施した。これらの調査から得られたデータを用いて、尺度の信頼性と妥当性と、本研究課題で開発するLSTが持つ効果についての多面的な検証や (嘉瀬他, 2020)、感染症の予防行動に対してLSおよびSOCが持つ関連性についての知見の取得を行うことができた (Kase et al., 2023)。

2022年度は研究2および3の目的に沿い、健康教育プログラムの開発と試行に取り組む計画であった。新型コロナウイルスの感染拡大の影響から実験群と統制群を設定するような研究デザインによる効果検証を実施できなかったものの、基礎となるプログラム案を検討することができた。加えて、2020年度より研究3における発展的・副次的な目的として継続していた、SOCおよびLSを測定する尺度の信頼性と妥当性に関する検証と、LSとSOCが関連を持つ健康関連行動についての検討についても一定の成果を得た。まずLSを測定する尺度の信頼性と妥当性については、4カ国から得られたデータを分析することで国外においても使用可能であることを示すことができた (Kase et al., 2023)。今後教育プログラムの効果検証を行う際にはこの尺度を使用することで、国際的に比較可能な知見を得ることができる。ま

た、新型コロナウイルスに対する予防行動と LS および SOC の関連の調査についても、健康行動の関連からプログラムの開発につながる知見を得ることができた。

以上が本研究課題から得られた成果である。LST プログラムの効果検証は今後も継続して実施することとなった。

引用文献

- Antonovsky, A. (1987). *Unravelling the mystery of health: How people manage stress and stay well*. Jossey-Bass.
- 古川壽亮・大野 裕・宇田英典・中根允文 (2002). 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究 平成 14 年厚生労働科学研究費補助金 (厚生労働科学特別研究事業) 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 研究報告書
- Kase, T. (2023). Construct validity of the 29-Item Sense of Coherence Scale: Exploratory analysis of a compatible three-factor model using a Rasch measurement model. *The Japanese Psychological Research*, 65, 48–56.
- 嘉瀬貴祥・坂内くらら・大石和男. (2015). 大学生におけるライフスキルの特徴についての探索的検討—精神的健康の向上を目的としたライフスキル教育の観点から— 学校保健研究, 57, 246-256.
- Kase, T., & Endo, S. (2023). Cross-cultural validation of the Short Form of the Life Skills Scale for Adolescents and Adults in adolescents in four countries. *Journal of Psychoeducational Assessment*.
- Kase, T., Endo, S., & Oishi, K. (2016). Process linking social support to mental health through a sense of coherence in Japanese university students. *Mental Health and Prevention*, 4, 124–129.
- 嘉瀬貴祥・飯村周平・坂内くらら・大石和男 (2016). 青年・成人用ライフスキル尺度 (LSSAA) の作成 心理学研究, 87, 546-555.
- Kase, T., Ueno, Y., & Endo, S. (2023). Association of sense of coherence and resilience with distress and infection prevention behaviors during the coronavirus disease pandemic. *Current Psychology*.
- 嘉瀬貴祥・上野雄己・大石和男. (2016). 高い Sense of Coherence を持つ者のライフスキルの特徴と構造に関する探索的検討 パーソナリティ研究, 25, 93-96.
- 嘉瀬貴祥・上野雄己・島本好平・大石和男 (2020). 高い Sense of Coherence を持つ者の日常生活における問題への対処にかかわる行動や思考の特徴—計量テキスト分析による質的検討— ストレス科学研究, 35, 21-31.
- Kase, T., Ueno, Y., Shimamoto, K., & Oishi, K. (2019). Causal relationships between sense of coherence and life skills: Examining the short-term longitudinal data of Japanese youths. *Mental Health and Prevention*, 13, 14–20.
- 島本好平・石井源信 (2006). 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54, 211-221.
- Super, S., Wagemakers, M. A. E., Picavet, H. S. J., Verkooijen, K. T., & Koelen, M. A. (2016). Strengthening sense of coherence: opportunities for theory building in health promotion. *Health Promotion International*, 31, 869–878.
- World Health Organization (1994). Life skills education for children and adolescents in schools. World Health Organization. Retrieved from <https://apps.who.int/iris/handle/10665/63552> (May 31, 2023)
- 山崎喜比古 (1999). 健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念 SOC *Quality Nursing*, 5, 825-832.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 Kase Takayoshi, Ueno Yuki, Endo Shintaro	4. 巻 -
2. 論文標題 Association of sense of coherence and resilience with distress and infection prevention behaviors during the coronavirus disease pandemic	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12144-023-04359-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kase Takayoshi, Endo Shintaro	4. 巻 -
2. 論文標題 Cross-Cultural Validation of the Short Form of the Life Skills Scale for Adolescents and Adults in Adolescents in Four Countries	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Psychoeducational Assessment	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/07342829231155306	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kase Takayoshi, Kawagoe Toshikazu	4. 巻 12
2. 論文標題 Life Skills Link to Mind Wandering Among University Students: An Exploratory Study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1~8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2021.729898	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Yano Kosuke, Kase Takayoshi, Oishi Kazuo	4. 巻 63
2. 論文標題 Sensory Processing Sensitivity Moderates the Relationships Between Life Skills and Depressive Tendencies in University Students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 152~163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12289	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kase Takayoshi	4. 巻 65
2. 論文標題 Construct Validity of the 29 Item Sense of Coherence Scale: Exploratory Analysis of a Compatible Three Factor Model Using a Rasch Measurement Model	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 48 ~ 56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12348	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yano Kosuke, Kase Takayoshi, Oishi Kazuo	4. 巻 42
2. 論文標題 The Associations Between Sensory Processing Sensitivity and the Big Five Personality Traits in a Japanese Sample	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Individual Differences	6. 最初と最後の頁 84 ~ 90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1027/1614-0001/a000332	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kase Takayoshi	4. 巻 65
2. 論文標題 Construct Validity of the 29-item Sense of Coherence Scale: Exploratory Analysis of a Compatible Three-factor Model Using a Rasch Measurement Model	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12348	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yano Kosuke, Kase Takayoshi, Oishi Kazuo	4. 巻 42
2. 論文標題 The Associations Between Sensory Processing Sensitivity and the Big Five Personality Traits in a Japanese Sample	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Individual Differences	6. 最初と最後の頁 84 ~ 90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1027/1614-0001/a000332	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kase Takayoshi、Endo Shintaro	4. 巻 29
2. 論文標題 Reliability and Construct Validity of the Leipzig Short Scale of Sense of Coherence (SOC-L9) in Japanese Sample: The Rasch Measurement Model and Confirmatory Factor Analysis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of Personality	6. 最初と最後の頁 120 ~ 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2132/personality.29.2.11	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yano Kosuke、Kase Takayoshi、Oishi Kazuo	4. 巻 62
2. 論文標題 Sensory Processing Sensitivity Moderates the Relationships Between Life Skills and Depressive Tendencies in University Students	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 1 ~ 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12289	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 嘉瀬 貴祥、上野 雄己、島本 好平、大石 和男	4. 巻 35
2. 論文標題 高いSense of Coherenceを持つ者の日常生活における問題への対処にかかわる行動や思考の特徴：計量テキスト分析による質的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ストレス科学研究	6. 最初と最後の頁 1 ~ 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5058/stresskagakukenkkyu.2020001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 嘉瀬貴祥，上野雄己，島本好平，大石和男	4. 巻 35
2. 論文標題 高いSense of Coherenceを持つ者の日常生活における問題への対処にかかわる行動や思考の特徴 計量テキスト分析による質的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ストレス科学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 嘉瀬貴祥, 上野雄己	4. 巻 28
2. 論文標題 Sense of Coherenceによる精神的健康の横断的・縦断的予測可能性の検討 線形回帰モデルと一般化加法モデルによる推定	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 175 ~ 178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2132/personality.28.2.7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yano, K., Kase, T., & Oishi, K.	4. 巻 6
2. 論文標題 The effects of sensory-processing sensitivity and sense of coherence on depressive symptoms in university students	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Health Psychology Open	6. 最初と最後の頁 1 ~ 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/2055102919871638	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 嘉瀬貴祥, 上野雄己, 下司忠大
2. 発表標題 Dark Triadとの関係からみるSense of Coherenceの概念的特徴 正準相関分析を用いた検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 嘉瀬貴祥, 上野雄己, 遠藤伸太郎
2. 発表標題 COVID-19禍における感染予防行動尺度の作成
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本田周二, 狩野芳伸, 嘉瀬貴祥, 村中誠司, 荒牧英治, 嶋田洋徳
2. 発表標題 健康心理学研究における自然言語処理の活用可能性を考える
3. 学会等名 日本健康心理学会第34回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yano, K., Kase, T., Oishi, K.
2. 発表標題 Reinvestigating the relationships between sensory processing sensitivity and life skills among Japanese samples
3. 学会等名 Society for Personality and Social Psychology 2020 Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 雲財啓, 磯和壮太郎, 嘉瀬貴祥, 今井田貴裕, 戸ヶ里泰典, 福井義一
2. 発表標題 健康生成論再考その3 大学生対象の研究から探るSOC研究の発展可能性
3. 学会等名 日本健康心理学会第32回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川越敏和, 嘉瀬貴祥, 小野田慶一, 山口修平
2. 発表標題 「やる気」とマインドワンダリングの関係
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯和壮太郎, 今井田貴裕, 雲財啓, 嘉瀬貴祥, 銅直優子
2. 発表標題 健康生成論再考その2 健康生成論研究の重要性と心理学的視点の必要性
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岸野雄次, 嘉瀬貴祥, 鈴木平
2. 発表標題 パーソナリティ・プロトタイプとソーシャルスキルとの関連
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kiji, M, Kase, T, Nigorikawa, T
2. 発表標題 Examination of the influence of short-term nature experience on spiritual pain
3. 学会等名 24th annual congress of the European College of Sport Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------